
MIRROR

雪村 圭

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MIRROR

【Nコード】

N8416I

【作者名】

雪村 圭

【あらすじ】

世界が蒼く透き通っていた時代。

魔法と科学が調和して生きている全ての生命は幸福に包まれていた。けれど世界に亀裂が入って約束は零れていく。

田舎町リヴァースで生まれた少年ミラーは世界の全てを知るために拙い足取りで旅を始めた。

プロローグ（前書き）

世界が蒼く透き通っていた時代。

魔法と科学が調和して生きている全ての生命は幸福に包まれていた。けれど世界に亀裂が入って約束は零れていく。

田舎町リヴァースで生まれた少年ミラーは世界の全てを知るために拙い足取りで旅を始めた。

プロローグ

世界が終わるのは目に見えている

私たちはそれを停める術を知っているけど

私たちは息をする事が出来ないし輪廻を停める術は知らない。

創造主は私たちを創った。

私たちは世界を造った。

いま 滅びの一途を辿るあなたたちは私たちを躍起になって探している。

私たちは逃げも隠れもしない。

いつか生まれたあなた達がこの世界を守るなら
私たちはこの世界を滅ぼすでしょう

それが創造主との約束だから。

この世界は醜くて残酷。

それは私たちの気まぐれ

あなた達が生まれたのは

創造主のきまぐれ。

それだけは紛れも無い真実。

終焉へのはじまり

私は走った。

息が壊れる程に。

訳の解らない何かに追われてるから。

「やだ！！なんなの！？」

靴はお出かけ用だから少しヒールがあって走るには不向き。
なのにこの山道をスカートをたくし上げて走った。

地面に意地悪に生える大樹の根っこ。

私をおちよくるように向かってくる小虫達。

私は懸命に走った。

立ち止まったらきつとこの訳の解らない何かに襲われる。

私を追いかける獣じみたそれは笑うように雄叫びを上げた。

「ぐおおおお！！」

それが上げた声の大きさに私は驚いて躓いてしまった。

「きゃー！！」

丁度よく足元にあった蔦に足をとられ地面に顔を寄せた私は咄嗟に顔を庇った。

「！！！！」

耳を裂く雄叫びが森に響く。

もう駄目！！そう思った。

でも何も起こらなかった。

ただ身体に生温い何かを浴びた。

その次の瞬間 何かが覆い被さってきた。

閉じた目を見開いた先には私と変わらない子が息を荒げていた。その手には長く鋭い光を放ってる剣が携えてある。

「あ……ありがとう……」

この銀色の髪を靡かせた少年は笑うでもなくただ自分が仕留め獣をジツと見つめている。

「あの・・・助けてくれたんでしょ？」

覆い被さる少年は私の声にやっと顔をこちらに向けてくれた。そして少し震えた目がきつく閉ざされる。

「どこか痛いのか？」

「・・・違う・・・」

その発せられた声は何処かこの世のものには聞こえない美しい音を奏でた。

「ちょ・・・！！！」

そして私に身体を預けるようにぐったりとして動かなくなってしまう。

その横にはこの世界のものじゃないような獣が息絶えていた。

「・・・ちよつと・・・これどーすんのよ・・・」

いつもの買出しを終えて帰る途中での出来事に私は絶句した。
だってこんな夢見たいな獣と少年が現れるなんて……。

おろし立ての白いワンピースは泥と血に染まってギトギト。

私を助けてくれたこの少年は息をしているかどうかすらわからない。

逃げている途中に置いて来た晩御飯の材料。

きつと母さんに怒られるじゃない!!

そう現実に戻って私は憤慨した。

でもこの名前も解らない少年を置き去りにするような事は出来ない。
もししたら母さんにもっと怒られる。

「もっ!!しょうがないな……よいしょ!!」

肩に抱えた少年は驚くほど軽くて少しビックリした

男の子だよね??

ずるずる引きずりながら山の麓のある私の村を目指した。

これが現実かわからないまま・・・

終焉へのはじまり

「ただいま・・・」

家に帰った私を見て母さんはビックリした。
肩に抱えた少年と私の顔を交互に見て。

急いで村長の所に走って行った母さんの後ろ姿に少し苦笑い。
だってぼろぼろの娘を見て怪我してるんじゃないかって心配しない
のかしら？

ま、怪我したって自分で薬位作れるけどね。

この村は別名 薬草の箱庭。

この村の周りにしか生えない珍しい薬草が生えるからそんな風に呼
ばれてる。

本当の名前を忘れられてしまうほど。

「あゝ！！重い！！いくら軽くつてももう無理！！」

玄関に入ってすぐに少年を下ろした。
ずるずる引きずってきたけどいくらなんでも16歳の私にだって無
理なものは無理！！

それにしても名前も知らないこの少年は息をしてないみたい・・・。

「・・・死んじやったの？」

目蓋がピクって動いた。

「・・・生きてるみたい」

・・・床に寝かしておくのはまずいから最後の力を振り絞って襟を引っ張って引きずってベットまで運ぼうとした。

バン！！！！！！

「え？」

勢いよく開かれた玄関の前に息を荒げた母さんと腰の曲がった長老がいた。

「アリアー！その子はどつしたの？！」

「えっと・・・助けてもらった」

「助けてもらった？山賊にでも襲われたの？」

母さんは興奮したように声をあげる

「まあまあ・・・イコリア。そう興奮するでない」

それを制したのは長老だった。

「ふおおおお・・・そうかそうか・・・ついに来たか・・・」

楽しそうに長老は笑うと私の前まで来て立ち止まる。正確には私を助けてくれたこの子前だけど。

「起きなさい・・・ミラー・・・」

長老の声に反応してミラーと呼ばれたこの子は目を開けた。

「なぜ？ぼくのなを．．．？」

長老は長く蓄えた髭を摩りながら眉毛に隠れた目を開いた。

「秘密の村より使者が訪れこの村の奇跡を救う。古い言い伝えじゃよ．．．」

「．．．ひみつのむら？ぼくの村はそんな名前じゃ．．．」

「傷が開く．．．それ以上は話すでない。今宵はゆるりと休まれよ。この村の奇跡を救った。それは事実じゃ．．．」

長老は優しくけれど制するように言った。

私にはなにがなんだか解らなくて母さんをみたけど母さんは何処か複雑そうな表情で目を伏せた。

「きみは．．．だれ？」

私は床にへたり込んだ。そしてまた目を閉じたミラーに話しかけた。ただど返事は無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8416i/>

MIRROR

2010年12月10日23時09分発行